



JICA海外協力隊 がゆく Vol. 19

今回は高校生の頃からの思いがエチオピアでの活動につながった隊員を紹介します。

in エチオピア 佐賀千紘

さが・ちひろ 31歳
出身地:兵庫県 職種:コミュニティ開発
任期:2017年10月~2019年10月



楽しく覚えられる
手洗いソングを
作りました♪



みんなで
歌いましょう!

現地の参加者とともに手洗いソングを歌う佐賀さん(右の帽子の人物)。



ロープポンプを設置している村の住民にヒアリングを実施。



幼稚園での指導の様子。シールを使ったゲームで手のどこに雑菌がいるかを伝えた。



私が JICA 海外協力隊に興味を持ったのは、高校生のとき。通学路の途中に貼ってあった JICA 海外協力隊のポスターを見たことがきっかけです。ポスターに写ったアフリカの子どもたちのきらきらした目を見て「なぜアフリカは貧しくて大変な環境のはずなのに、子どもたちの目はこんなに輝いているのだろう」と思ったのです。その後、大学生となりフィリピンで何度かボランティア活動

をして就職しましたが、アフリカで活動したいという思いが消えず勤めていた会社を退職。アフリカで自分の経験を生かせそうな募集に応募し、派遣が決まりました。エチオピアでは配属先や村の人々とともに、JICA の技術協力プロジェクトによって普及したロープポンプの利用状況調査や保守管理の支援を行いました。また、子どもたちの衛生問題の改善を目的とした手洗い指導にも取り組みました。ロープポンプとはロープで作られた簡易ポンプのことで、ハンドルを回すだけで簡単に水をくみ上げることが出来ます。村の家庭にある浅井戸に設置するものなのですが、私はおもに設置された村に赴いてメンテナンスと普及状況の調査をしていました。手洗い指導は、幼稚園や小学校の現場で活動する隊員たちと一緒に行いました。手洗いの方法だけでなく、なぜそれが必要なかを伝えることも大切です。紙芝居ミニゲーム、手洗いソングを用いて楽しく覚えられるようにしました。なかでも手洗いソングは、音楽の先生を目指す現地の方に作曲を依頼し、エチオピアのダンスも加えました。子どもたちになじみやすく、歌いながら自然に正しい手洗い方法が身につくと、とても好評でした。

幼稚園や小学校だけでなく、孤児院や難民キャンプなどさまざまな場所でも手洗いの大切さを伝え続けた結果、町を歩いてみると子どもたちから「手洗いしてるよ」と声をかけられることも。現地のお母さんたちから、子どもがおなかをこわすことが減ったという話を聞いたこともうれしかったです。隊員の活動を終えた現在、私は途上国の人たちが来日して日本の知見を学ぶ研修に関わる仕事を生かして、彼らに寄り添っていきたいと思っています。

+one information

コーヒーとともにある 人々の暮らし

憧れのアフリカに行くことが決まったばかりの頃は、メディアで見たカラフルな洋服やお尻を振るダンスといったアフリカ文化に触れることを楽しみにしていました。しかし、いざエチオピアに行ってみると想像とは違っていたのです。カラフルな服ではなく真っ白な伝統衣装、お尻ではなく肩を揺らすダンス——すべてにおいて独自性がありました。エチオピアは、サハラ砂漠より南にある地域の中で唯一植民地化されることがなく、独自の文化が色濃く残る国なのです。

なかでも「コーヒーセレモニー」は特徴的です。エチオピアは「コーヒー発祥の地」ともいわれ、エチオピアコーヒーは世界的にも有名です。もちろん国民にとってもコーヒーは生活の一部。アフリカの他国でも生産していますが、それはほぼ輸出用です。この国では生産量の半分が国内で消費されるというから驚きです。

コーヒーセレモニーは日本でいう茶道のようなもの。客人をもてなすときの伝統的習慣で、淹れ方に独特のルールがあります。なんと、まずは焙煎していない生のコーヒー豆を水で洗うのです。そのあと、きれいになったコーヒー豆を火で煎ってから粉状にし、コーヒーを淹れます。生の豆を使うこと、コーヒーは3杯淹れることが作法であるコーヒーセレモニーは2~3時間かかるのが当たり前。時間をかけてゆっくりと、コーヒーのおいしさと客人との会話を楽しむのです。また客人をもてなすときだけではなく、食事の後にすることもあります。

エチオピアでは、「ブナバット(コーヒー屋)」がいたるところにあります。私の同僚は毎朝出勤するとすぐに「コーヒー屋に行くぞ!」と誘ってくれて、店に着くと必ず何人ものほかの同僚に会いました。飲み方も多種多様です。おちよこのような小さいカップを使い、ブラックか砂糖を入れるのが定番ですが、田舎に行くと塩を入れて飲む人々も。香り高いエチオピアコーヒーにはほんのひとつまみ塩を加えると、香りが引き立ってよりおいしくなるのだそうです。日本では当たり前の食文化も、実は世界では多様だということを実感した経験でした。

(佐賀千紘)



イラスト ● さががわ成美